

ジャイナ教の行伝説話における転輪聖王

山 畑 倫 志

1. はじめに

理想の君主の呼称として仏教、ヒンドゥー教の文献に度々現れる転輪聖王 (Cakravartin) はジャイナ教の伝統の中でも頻繁に言及される。ジャイナ教の説話にはその行伝を主題とした説話が数多くあり、単なる特徴の記述に止まらず、具体的な行伝という形を取っている。しかし、ジャイナ教の説話文献は未刊行のものも多くその全容は明らかではない。本稿ではその一例として写本にのみ残るアパブランシャ語 (Ap.) の説話 *Harisēṇacariu* (*Skt. Hariṣeṇacarita*) (*HC*) を取り上げて、その伝承過程を検討する。

2. 行伝説話とその言語

ジャイナ教徒たちは説話、詩などに関してはサンスクリット語 (Skt.) を用いながらも同時にそれらを俗語で著し、俗語使用の伝統を保持し続けていた。その際用いられた言語は *Jaina Māhārāṣṭrī* (JM.), *Jaina Śaurasēnī*, そして Ap. である。それらは Skt. の作品の翻案にも、また独自の作品の作成にも活用され、膨大な量の文献が作られた。*HC* に用いられている Ap. は種類のプラークリット語 (Pkt.) の中でもより近代諸語に近い特徴を見せる¹⁾。また、現存する作品はほぼ全て韻文の形式をとっている²⁾。Pkt. には散文の説話集などが残っているのにも拘らず、Ap. の作品にはそれが現段階では発見されていない。ここから Ap. は詩、文学の作成に特化した言語として位置づけられていたと考えられる。

ジャイナ教の六十三偉人³⁾ の行伝を記した行伝説話はジャイナ教説話の中核を占める。ジャイナ教では行伝説話のことを一般に白衣派では *caritra* もしくは *carita*, 空衣派では *purāṇa* と呼ぶ⁴⁾。また Pkt. では *cariya*, Ap. では *cariu* などの名称がどちらの派でも用いられている。六十三偉人の中には十二人の転輪聖王も含ま

れている。Bharataḥṣetra 全土の支配者であることなどその基本的な性格は仏教等のものと同等と見なしうる。しかし、その細かな属性に関しては種類の違いも見受けられる。例えば、転輪聖王の所有する宝物は仏典に一般的に見られる七宝とは異なり、14の ratna と9の nidhāna/nidhi が示されている⁵⁾。なお、プラーナ文献でも14の ratna が示されている⁶⁾。

3. HCに見られる転輪聖王

本稿では転輪聖王の行伝説話の一つ HC を取りあげる。この作品の刊本は未だ存在しないため、Jaipur で得られた二本の写本⁷⁾ を元に校訂・翻訳の作業を進めているが、屈折語尾に関しては二写本間にかかなりの程度一貫した相違が存在する。Tagare は Ap. は作品の成立地域と言語特徴より東部、西部、南部の三種の区別ができるとしている⁸⁾。ただ、現在残っている Ap. の作品は西部のものに大きく偏っており、特にジャイナ教の説話の大部分は西部に分類されている。HC も写本の所蔵地及び言語特徴から西部のものと同判断している。本稿では言語の問題に関してはこれ以上は論じない。また、写本中には明らかに著者であると判断できるような名前は見られず⁹⁾、その成立年代を判断する根拠も今のところはない。全体の構成は4つの章 (saṃdhi) からなっており、それぞれ13, 12, 21, 19の節 (kaḍavaka)¹⁰⁾ を持つ。偈は基本的に2脚からなるが、節の末尾には4脚からなる ghattā 韻律¹¹⁾ の偈が挿入される。偈の総数は583である。

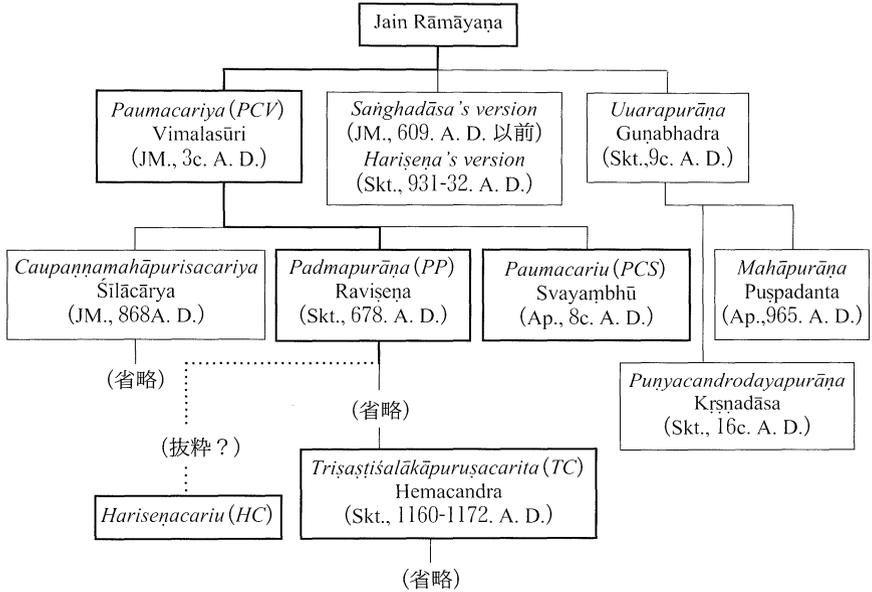
内容は10番目の転輪聖王である Hariṣeṇa が故郷を出て、放浪し、転輪聖王になり、涅槃に至るまでを描いた作品である。Rāmāyaṇa の敵役である Rāvaṇa とその父 Sumālin との会話を導入として始まる。Kāmpilya に住む王子 Hariṣeṇa がジナの教えを勧める母に従わない父を憂えて王子の位を捨てて放浪に旅立つ(第1章)。放浪の途中で寄った苦行者の庵で戦禍を避けて滞在していた王女 Madanāvali と出会い、互いに慕いあうも別離の憂き目に会う。しかし、別の放浪先で狂暴な象を調伏し、勇士として讃えられ、その地の王女達と結婚する(第2章)。その後、ヴィドヤーダラの王女の使いにより攫われて、その王女と結婚するも、その兄たちと争いになり、激しい戦いの後に勝利する。その後、Madanāvali の国を救い、自国に凱旋し、ついには転輪聖王となる(第3章)。そして最後に、現世の幸福にむなしさを感じた彼はジナの教えに従って苦行者となり、涅槃を得る(第4章)。

転輪聖王としての行伝は第3章で終わっており、その末尾の ghattā において著

者の名らしきものがある。そのため第4章は付加されたものとも感じられるが、他の説話に含まれる Hariṣeṇa の行伝も苦行者となり涅槃を得たと記している。これはジャイナ教の転輪聖王一般に見られる特徴であるので¹²⁾、第4章は付加されたものではない。仏教では転輪聖王と仏を対比させているのに対してジャイナ教では転輪聖王となった後に、出家し苦行者となって涅槃に入るとされている。

4. HC の伝承過程

HC の登場人物、話の筋、表現方法等にはそれ以前の作品からの借用と考えられる点がいくつかある。その由来については *Paumacariya* (PCV) 内の Hariṣeṇa の行伝と *Bṛhatkathā* の関係を土田龍太郎氏が論じているが¹³⁾、本稿ではジャイナ教の伝統の中での伝承過程を対象とする。この Hariṣeṇa 王の一編は他の大部のジャイナ教説話にも簡単な形ではあるが、包含されている。HC と同様の構成を持つものとしては、ラーマ物語のジャイナ教的翻案である JM. の PCV、及びそれに習ったと考えられる Skt. の *Padmapurāṇa* (PP)、Ap. の *Paumacariu* (PCS) がある。下図は V. M. Kulkarni によるジャイナ教のラーマ物語の系譜図¹⁴⁾ を基に作成した HC の系譜図である。これらの翻案ラーマ物語には *Rāmāyaṇa* には見られない六十三偉人の行伝が織り込まれている。Kulkarni は図にあるように PCV を最古のジャイナ教ラーマ物語であると見なし、PP と PCS はそれぞれ直接に PCV を参照したものとしている。ここではそれに従って HC の系統を考える。PCV は 8. 143-210 の部分を Hariṣeṇa の行伝に割いており、その話の筋や固有名詞はほぼ完全に HC と一致している。それに続く PP は作品全体として PCV の影響下にあることが明らかであり、内容もほぼ同じである。これには 8. 272-401 に Hariṣeṇa の行伝が収められている。HC の行伝においても話の展開は PCV とほぼ同様であり登場人物達同士の会話がやや増えている程度である。PCS は HC と同様に Ap. によるものであり、さらに後代のものと考えられているが、Hariṣeṇa への言及は 11. 2 の 9 偈のみであり、その表現は極めて簡潔である。HC の著者が独自に PCS を敷衍して PCV、PP と同じ内容になったとは考えがたい。それゆえ、HC は同一言語の PCS の記述から作成されたものではなく、PCV から PP への流れを汲んだ作品と考えられる。また、HC には PCV、PP には少ない修辭的な表現が見受けられる。Madanāvalī が初めて Hariṣeṇa に出会い、恋に落ちた場面の表現を比較すると、PCV と PP の簡潔な表現に対して HC では 2. 4. 4-8 において Hariṣeṇa の描写や感



情表現等について比喩を多用していることが知られる。

datthūṇa ya hariseṇaṃ kannā sā laliyajovvaṇāpuṇṇā /
 pulayanti na ya tippai viddhā kusumāuhasarehiṃ // (PCV 8. 160)
 nāgavatyāḥ sutā tasmin dṛṣṭvā taṃ rūpaśālinam /
 manmathasya śarair viddhā tanuviklavatākaraiḥ // (PP 8. 304)
 anurāu jāu pekkhevi tiya / sukumāramaṇohara ahiyasiya // 4
 dhavalujjalanettavisāliyahem / hariseṇu vi pekkhai vāliyahem // 5
 paviyambhiu pimmarāyaramaṇu / vammaharai ukkovaṇajalaṇu // 6
 savaḍammuha jhatti nievi thiṃ / ṇaṃ ṇayaṇiḥi kaṃṭhāgahaṇu kiṃ // 7
 aṇṇuṇṇaneha aṇurāiyae / piyadaṃsaṇi saṃgummāiyae // 8 (HC 2. 4)

HCと同じPPの系統に属するTriṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita (TC)も修辭的表現に富んでおり、その点ではHCと類似している。しかしTC 7. 12のHariṣeṇaの行伝の内容は大半が転輪聖王の特質を述べるに止まっており、固有名詞も相当数異なっている。したがって、HCはTCを介在していないと考えられ、上記の系譜図におけるHCの位置を定めた。ただ、このような修辭表現はジャイナ教ラマ物語の伝統からだけでは説明できない。インド一般の美文学や説話文学の表現の影響が

予想される。今後の課題は Ap. の作品に対する Kāvya の影響を明らかにし、ジャイナ教説話の変容の過程を探ることである。

- 1) Cf. G. V. Tagare, *Historical Grammar of Apabhraṃśa*, Poona, 1948, p. 15.
- 2) Cf. Vit Bubenik, *A Historical Syntax of Late Middle Indo-Aryan (Apabhraṃśa)*, Amsterdam, 1998, p. 27.
- 3) その詳細は V. M. Kulkarni, 'Character of Jain Mythologie', 1990 (*Studies in Jain Literature: the collected papers*, published by J. B. Shah. Ahmedabad, 2001, pp. 1-12) 参照.
- 4) Cf. M. Winternitz, *A History of Indian Literature*, Vol. 2, translated by S. Ketkar and H. Kohn and revised by the autor, Calcutta, 1933, p. 504.
- 5) “nava jāsu nihāṇaiṃ akkhayaiṃ / cauddaha bara rayāṇa mahagghayaiṃ // “(HC 3. 21. 8) [9 の不滅の nidhāna と 14 の大變価値のある素晴らしい ratna を持つ者は].
ジャイナ教説話の 14 の ratna は「將軍 (senāpati), 居士 (grhapati), 司祭官 (purohita), 象 (gaja), 馬 (asva.), 大工 (vārddhaka), 女 (stri), 輪 (cakra), 傘蓋 (chatra), 皮革 (carman), 珠 (maṇi.), 銅貨 (kākiṇī), 刀 (khaḍga), 杖 (daṇḍa)」である.
- 6) *Bhāgavatapurāṇa* 9. 23. 32 や *Viṣṇupurāṇa* 4. 12. 3 にも転輪聖王の持つ 14 の ratna の記述が見られるため、少なくとも ratna に関してはジャイナ教独自のものとは言い難い.
- 7) 写本 A: Jaipur の Jain Vidyā Saṃsthān, Apabhraṃś Sāhitya Akademi 所蔵. 27cm × 11.5cm, 24 葉, 紙, ナーガリー文字. 書写の日付は 1583 年 (基づいている暦は不詳) Āṣāḍha 月白月 10 日土曜日.
写本 B: Jaipur の Śrī Digambar Jain Mandir Mahāsaṅgh 所蔵. 26cm × 11.5cm, 17 葉, 紙, ナーガリー文字. 書写の日付は 1551 年 (同上) Mārgaśira 月黒月 8 日木曜日.
- 8) G. V. Tagare, *op. cit.*, p. 15.
- 9) 第 3 章の末尾に” kavi jiyau navai sapaṇayataṇu // “ (HC 3. 21. ghattā) 「尊崇されるべき身体を持つ詩人 Jiva に敬礼する」とある。これが著者の名である可能性がある.
- 10) saṃdhi は章, kaḍavaka, は節に相当する. Cf. H. Jacobi, *Bhavisatta Kaha von Dhanavāla*, München, 1918. Abhandlung pp. 43-45.
- 11) *Ibid.*, p. 46. Cf. L. Alsdorf, *Der Kumārapālapratibodha*, Hamburg, 1928. Abhandlung p. 74.
- 12) Cf. John E. Cort, 'Who Is a King?', *Open Boundaries*, New York, 1998, p. 98.
- 13) 土田龍太郎, *The story on king Hariṣeṇa related in a Jaina Rāmāyaṇa*, 平成 7 年度 - 平成 9 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書, 1999, pp. 5-12.
- 14) Hermann Jacobi, *Paumacariyaṃ*, Introduction by V. M. Kulkarni, p. 4. なお中野義照訳・ヴィンテルニッツ著『ジャイナ教文献』1976, p. 456 にも掲載されている.

〈キーワード〉 *Hariseṇacariu*, 転輪聖王, アパブランシャ語, 行伝, Jain Rāmāyaṇa
(北海道大学大学院)

According to legend, Shinran's 親鸞 mother was the daughter of Minamoto Yoshiie's 源義家 legitimate son Yoshichika 義親. There is a strange story which was created in recent times that it is possible she was born in the extension at Tsūbō-ji. It is said that Yoshichika committed murder and mayhem hither and yon until subdued in January 1108 by Taira no Masamori 平正盛, grandfather of Taira no Kiyomori 平清盛. If we suppose this daughter was born in 1108, since Shinran was born in 1173, her mother would have given birth at age 65.

155. The legend of Satī in the *Kālikā-purāṇa*

Chisato MAEDA

Satī is a daughter of Dakṣa and a wife of Śiva. Dakṣa celebrated a festival of sacrifice, but did not invite Satī or Śiva. Hence, she was racked with grief and perished by throwing herself into a fire. The gods hacked to pieces her dead body. The fragments of her dead body fell down everywhere. Those places, in which many goddesses were born, have been called Śākta-pīṭha. The legend of Satī is an important myth that explains the origin of Śākta-pīṭhas. Moreover the legend is related to the custom of widow suicide in Hindu society.

How is Satī described in the *Kālikā-purāṇa* which was composed to spread Śakti's worship? In this paper I address two points, the birth and the death of Satī.

156. The Cakravartins in the Jain Carita Literatures

Tomoyuki YAMAHATA

The *Hariseṇacariu* (Skt. *Harīṣeṇacarita*) is an example of Apabhraṃśa narrative literature and Hariṣeṇa is one of the twelve Cakravartins in the Sixty-three Jain Great Men (Śalākā/Mahā-puruṣas). Though the Jain features of the cakravartin basically correspond with Buddhist ideas, there are various differences. Particularly, the Buddhist cakravartins are the sovereign of this

world to the end, the Jain cakravartins renounce worldly pleasures and enter nirvāṇa; the last (fourth) chapter of the *Hariseṇacariu* describes it in detail.

Some Jain Rāmāyaṇa texts contain the biography of Hariṣeṇa. To locate the *Hariseṇacariu* in the tradition of Jain Rāmāyaṇas, the story of Hariṣeṇa is comparable with the *Paumacariya*, the *Padmapurāṇa*, the *Paumacariu* and the *Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita*. According to V. M. Kulkarni, the *Paumacariya* is the oldest and divided into three branches. Among them, the *Padmapurāṇa* resembles the *Hariseṇacariu* in plot. However, the *Paumacariu* simplifies Hariṣeṇa's story.

Although *Hariseṇacariu* has many rhetorical expressions and the *Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita* abounds with them, these are different from each other both in plot and proper names.

We can conclude that the *Hariseṇacariu* belongs to the *Padmapurāṇa* branch, not derived from the *Paumacariu*, and that there is no direct connection with the *Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita*.

157. A Study on the Oriya *Mahābhārata* Discovered in Japan

Shobha Rani DASH

A palm leaf manuscript of the Oriya *Mahābhārata* written by the famous Oriya poet Śūdrāmuni Śrīsāraḷādāsa of the mid 15th c. was transmitted to Tsusima-cho of Ehime prefecture in Japan during the 18th century A.D. It is assumed that the manuscript was transcribed in the beginning of the 17th c. It was written in the medieval Oriya language using the medieval Oriya script except the invocation to Lord Gaṇeśa, which is in Sanskrit. It consists of 221 leaves (transcribed on both sides), a few blank leaves and a bamboo cover. In the beginning and the end of the manuscript it mentions clearly that it is the first part of the Āraṇyakaparba of the *Mahābhārata*. It is a typical manuscript of Orissa, an Eastern state in India. The most interesting point to note is that it is not just an Oriya translation of the Sanskrit *Mahābhārata*, but is an Oriya version of it. Since 2001, I have been working on its romanized edition and Japanese translation along with Mr. Nobuyuki Kashiwahara and